香取遺産 Vol.22

「悪臭を追い、不浄を祓(はら)う」

良文(よしぶみ)貝塚出土 人面付香炉形土器(じんめんつきこうろがたどき)

良文貝塚は、小見川区貝塚にある縄文時代後期を中心とする利根川下流域最大級の貝塚です。その存在は古くから知られており、明治28年（1895）には東京帝国大学が発掘調査を行っています。昭和2年には大山史前学研究所(おおやましぜんがくけんきゅうじょ)が、4年には同研究所と地元有志が発掘調査をして多くの土器や骨角器(こっかくき)などが発見されました。これらの成果と地元の熱意によって、昭和5年、千葉県の貝塚としては初めて国史跡に指定されました。

今回紹介するのは、昭和4年の発掘調査で発見された人面付香炉形土器で、約3500年前の縄文時代後期中ごろのものです。香炉形土器とは、仏具の香炉に似ていることからそう呼ばれています。縄文時代中期中ごろに中部地方や関東地方で作られた釣手土器が前身といわれ、その不思議な形から、呪術的な用途に使用されたと考えられています。

本土器は、頂部と左側面の一部を欠失しますが、ほぼ完全なものです。現高16㎝、鉢形土器に脚台を付けた形で、正面に人面を貼り付け、背面には丸い大きな孔が開いています。縄文人の自画像でしょうか、それとも神霊・祖霊を表現したのでしょうか。写実にこだわらない、実に大胆な表現で、器の形・文様と一体化しています。また、右側面に筒状の突起があり、中央に孔が貫通しています。この孔は器体を吊り下げるための紐通し孔で、左側にも同じものが付いていたと思われます。

おそらく、この土器はその名の通り、香を焚くのに使ったものと思われます。ほの暗い竪穴住居の中、薄らと映る人面土器から立ち昇る煙、悪臭を追い、不浄を祓ったのでしょうか。

昭和32年10月「香炉形顔面付土器」として県有形文化財（考古資料）に指定されました。現在は、地元の保存団体によって厳重に保管されており、普段は公開されていません。

▲人面付香炉形土器